

世界中で盛大に行なわれ、多くの記念出版が相ついだことはよく知られているとおりで、ヒュームについても、もちろん『国富論』ほどの規模ではないが、いくつかの集会や出版があった。ヒュームは、彼が活動したすべての分野でながいあいだ誤解されてきたし、またそれぞれの分野であまり相互に関連なく評価されてきたので、彼の全体像をつかむことが甚だ困難であっただけに、この記念の年が持つ意義は大きかったといえる。近年、ヒュームをこれまでの固定的な評価から解放して、しかも諸分野にまたがってヒューム像を再興しようとする動きが高まっているからである。ここに取りあげるヒューム研究の著者については私はなにも知らないが、この研究もまた、こうした最近のヒューム研究の動向を代表するものの1つである。

この研究はある哲学叢書の1冊であって、ヒュームの経済思想そのものを分析しようとしたものではなく、書名が正確に語っているように、彼の経済的自由主義の誕生、つまり哲学から経済学への問題の展開を彼の方法論に即して解明しようとしたものである。著者によれば、ヒュームの研究者たちが『政治論集』(1752)の重要性については一致して認めながら、その経済思想史上の位置づけとなると、時代おくれの重商主義だとか自由主義の先駆者だとかさまざまに評価が分れるのは、ヒュームがいくつかの重商主義的ドグマ(その最たるものは貿易バランス論)を破壊したことをただ既知のこととして受取るだけで、それを可能にした彼の方法論に注目しないからである。そこで著者は、ヒュームの経済的自由主義を重農主義のそれと対立的に捉えながら、2つの概念によってヒュームの経済的自由主義の特質を解明して行く。その1つは「動物生理」(l'économie animale)、もう1つは「生産体」(le corps productif)である。「動物生理」ということばをヒューム自身が用いたわけではないが、これは生命循環にかんする18世紀前半の医学用語であり、一般によく用いられたことばである。「生産体」とは個体を社会体に結合し、社会体の持つ「生産的使命」に即して社会体内部の諸要素を連帯して働かせる組織機能として著者が作りだした概念である。——著者にとっては、「社会体」の政治的組織機能としての「政治体」という概念と対をなしている——著者はこの2つの概念を組合わせ、ヒュームの経済的自由主義が実は「生産体の成長」をめざすものであることを分析する。「動物生理」と「生産体」、この2つの概念の結合によるヒュームの経済的自由主義の誕生の解明、そして同時代のもう1つの経済的自由主義である重農主義のそれとの対比、これが本書

D・ドゥリュール

『ヒュームと経済的自由主義の誕生』

Didier Deleule, *Hume et la Naissance du Libéralisme Économique*. Paris, Aubier Montaigne, 1979, 412, [iii] pp.

ヒュームはスミスの『国富論』が出版された年(1776)に死んでいる。だから1976年は『国富論』の出版200年記念の年であるとともに、ヒュームの死後200年を記念する年でもあった。『国富論』のための記念の催しが

の基本的構成である。

著者はヒュームの経済学の把握を2段階に分けてみている。第1段は家産的経済モデルからの解放であり、第2段は生物学的モデルによる把握である。すなわち、ヒュームは『政治論集』の冒頭で少数の知識人の哲学的思考としての「深い思考」と大衆の日常的思考としての「浅い思考」とを区分し、一般に哲学がこの「浅い思考」を「深い思考」へと導くこと、また特に経済問題においては哲学者が「特権的な助言者」として——現実との一定の距離をおき、かつおだやかな懐疑の目をもって——個々の商人の「個別的情况」を超えて、これを「全般的問題」へと高めるべきであることを説いているのだが、著者はまずこれを家産的経済モデルからの解放とみる。さらに著者はヒュームがしばしば社会や国家を一箇の生命体になぞらえ、「生産体」の成長と衰退を生物学的類比によって説明する点をとらえて、これはヒュームがいったん家産的経済モデルから解放した経済学を動物生理をモデルとする経済学として捉え直しているのだと説明する。ヒュームは社会を時計や機械仕掛に見立て、そこに人間存在以上の存在の意図を想定することを「大衆の宿命」としてしりぞけ、神の意図の介入を許さない生物学的類比を「賢者の特権」として賞揚している、と著者は指摘する。ヒュームは自然を特別の恩恵によって恵まれたもの、あるいは神慮によって惜しみなく浪費的なものとはみないのであり、逆に自然は常に吝嗇であるからこそ、人間は絶えず労働によって財を獲得しなければならず、またそれによって所有権や正義の正当性が根拠づけられるのだという。人類はいかなる神の意図も実現せず、いかなる摂理の業も完成しないのである。人間の経済活動こそが最も重要であるとすれば、それは「見えざる手」によって社会に刻みこまれた窮極目的性によってではなく、ただ人類が生き残らざるをえないということによってである。だからヒュームにとっては神慮にかなったある外的な窮極目的性が問題なのではなく、盲目的で、無秩序で、いかなる難題も持たず、一種の自己保存の本能に対応するだけの内的な窮極目的性が問題なのである。著者はヒュームの生理学的モデルによる経済学の把握をこのように説明して、ヒュームの経済的自由主義の基本的特徴を「反摂理主義」と規定する。自然を本質と混同し、秩序の固持を第1とする重農主義のマルブランシュ的な「摂理主義」との根本的相異を著者は強調する。

こうして神慮から解放されたヒュームの経済的自由主義を、著者は現実的で、可変的で、能動的で、調整的な

性質を持つものとして特徴づける。著者は、ヒュームの経済的自由主義は基本的には経済の上昇局面において「生産体の成長」を促進するものとして現われるのであるが、下降局面においては「生産体」の、むしろ生き残りのための政策を示すものとして現われるのであるから、時としてそれは重商主義的な性格を示すのだという。ヒュームは貨幣の自動調節機能を認めて貿易差額論が現実的に非有効的であること、そして経済における先進国と後進国の交替が必然的であることを論証し——著者はこれを「生産体」の成長と「生産体」の内部原因による成長の停止として説明する——、自由主義的な立場を鮮明に示したのだが、同時に「生産体」の生存ないし成長のために必要であれば、幼稚産業の育成のためには当然のこととして保護関税政策をとる。同様のことは植民地問題についてもいえる。植民地が経済的自治を求める限りにおいては、ヒュームはこれを支持するが、植民地が独立を求めるとなると、彼はこれに反対して国家主義的立場をとる。ヒュームの現実主義は効用を判断の規準とするのであって、彼の政策が可変的なのは、ヒュームが具体的に国家の経済的利益を擁護しているにすぎないからである。著者はだから『政治論集』を経済的ナショナリズムを超えたものとして読むのは誤りであるという。要するにヒュームは経済の国家的使命、いいかえれば国家の力と臣民の幸福とを同時に確保するというアンチノミーを解決するために、「生産体」の絶えざる成長、ないしは衰退の積極的な阻止、そして生き残りという目的を常に忘れないのである。著者によれば、重商主義のパターンが action/intervention/empêchement であるのに対して、ヒュームの経済的自由主義は決して inaction/contemplation ではなく、action/intervention/facilitation なのである。著者はまたこれを重農主義の体系と比較して、『経済表』の体系は本来均衡の破壊を恐れる静態的なものであり、そこに「成長」が存在しないわけではないが、しかしそれは基本的には国家元首・地主の良き意志による支出の追加にすぎないという。ヒュームの経済的自由主義は単なる自由放任、つまり重農主義の laissez faire (なすにまかせよ)ではなく、これをスローガン風に表現すれば laissez croître (成長するにまかせよ)である、とも著者はいう。

ヒュームはいかにも、重商主義にとって本質的と思われるいくつかの理論を打ちこわしたのだが、その際ヒュームにとって重要であったのは、もちろん国家権力に根ざす重農主義体系を根底からつき崩すという使命ではなく、ただ laissez croître を遂行することであり、その

ために「生産体」の諸力を連帯させることであった。だからどんな理論でも、それが「生産体」の成長に有効であれば取り入れられた。理論体系としての一貫性や整合性は必ずしも必要ではなかった。ヒュームは『政治論集』の1764年版以降は、それ以前に否定的であった紙幣の役割について一定の評価を与えるようになる。つまり「紙幣の賢明な使用によって助長することのできるインダストリーと信用の増大」という効果が是認されるようになる、と著者は指摘する。またヒュームが短期的インフレーションの有利さを理論化して古い重商主義的貨幣論を貨幣数量説と組合わせたのは「歴史的状況と結びついた、そして学説上での重商主義から自由主義への移行」を示すものではあるが、著者はむしろこれをヒュームが「生産体の成長を自覚するにいたったこと」の表現であるとみるのである。こうして、その希少性のゆえに保蔵が求められた財宝としての貨幣が「生産的な力」として考察されることになり、「重商主義の文脈のなかで生まれたとはいえ、この流通という概念は、貨幣論の問題点として新重商主義と経済的自由主義との間の重要な連結点を提供する」ことになる、と著者は指摘する。

では、このような「生産体の成長」にとって必要とされる政治体はいかなるものであるべきか。ヒュームにとって、国家とは、抑圧的な力によってよりも、提供されるサービスによって、本質的にはなく歴史的に評価される「偶発的な制度」にすぎないのであって、「チェック・アンド・コントロール」が政治体の「避けられない解体」を遅らせるための調節役を果せるような機構であればよいのである。ヒュームにとっては、政治体の「腐敗」を防ぐことが「生産体」の成長のための第1の条件であり、社会体の生き残りのために、政治体の「腐敗」、「解体」を防止し、かつ「生産体」の成長をはかることが最も重要な問題となる。そしてこの2つの問題を解決するために、ヒュームは「生産体の触媒」であり、「政治体の仲介者」である *le marchand/négociant/entrepreneur* を中産階級として重視する、と著者は分析している。

さて以上が本書の基本的構成のほんのあらましである。わが国では小林昇教授がヒュームの農耕分離論によって、また田中敏弘教授がインダストリー論によってそれぞれ重要なヒューム論を示しているので、以上のような著者の分析結果のいくつかだけを取上げれば、それらが特に注目すべき成果をあげているとはいいがたいのであるが、わが国でのヒュームの経済学研究が純粋に経済学だけに限られているのに対して、著者が多分野にまたがり、か

つ大量の文献を駆使してヒューム像を多面的に構築しようとしていることは大いに学ぶべき点である。著者が「生産体」という概念を設定し、これに「動物生理」という概念を組合わせて、ヒュームの経済学を「生産体」の成長と衰退という視点から考察し、そこに現われるヒュームの相矛盾する面を、従来の経済学史的な区分や図式を離れて説明しようとしたことは興味深い。しかし著者は従来の形式的区分にとらわれなかったというだけで、見られるように別の図式を用意しなかったのだろうか。また著者が重要な分析用具として用いた「動物生理」という概念についていえば、ヒューム自身がわざわざ言及して用いたニュートンの方法とそれがどんな関係にあるのかについては、最も基本的な問題としてさらに立入った説明が必要であったはずであるし、また「動物生理」はむしろケネーの方法であったのであるから、ヒュームの経済的自由主義の基本的性格を反重農主義的摂理主義と規定するならば、ケネーの「動物生理」について、およびそれとケネーの「摂理主義」体系との関係について、もっと詳細な説明が必要ではなかったのだろうか。

〔津田内匠〕